

# 当 帰 飲 子

渡辺賢治 '00. 7. 3.

## 原典

『济生方』嚴用和 宋

心血凝滯し、内に風熱をつつみ、皮膚に発見し、遍身に瘡疥あり、或いは腫れ、或いは痒く、或いは膿水浸淫し、或いは赤疹瘡癩を發するを治す。

嚴用和：字は子礼。13世紀頃の南宋の廬山にて活躍した医家。『济生方』の成立は1253年頃。日本では鎌倉時代、梶原性善の『頓医抄』『万安方』に引用され、曲直瀬道三の啓迪集にも引用されている。

當歸飲子治心、血凝滯、內蘊風熱、發見皮膚、遍身瘡  
 疥或腫或痒或膿水浸淫或發赤疹瘡癩  
 當歸 去芦  
 生地黃 注  
 白芍藥 川芎  
 荆芥穗 各一兩  
 何首烏 防風 去芦  
 甘草 炙各半兩  
 右改咀每服四錢水一盞半姜五片煎至八分去  
 滓溫服不拘時候

## 処方構成

当帰 5、芍薬・川芎・蒺藜子・防風 3g、地黄 4g、何首烏 2g、荆芥・黄耆 1.5g、甘草 1g

## 方意

方中の当帰、芍薬、川芎、地黄は四物湯で、血を潤し血行を良くし、防風、荆芥は驅風とともに瘡毒を解し、瘀熱を發散する。

蒺藜子はハマビシ科のハマビシで、利尿、消炎などの作用があり、皮膚搔痒を治す。

何首烏にはタデ科のツルドクダミの塊根で、潤腸、瀉下、下毒、消炎などの作用がある。

荆芥、防風も荆芥連翹湯や十味敗毒湯などの皮膚疾患に用いる処方に含まれることが多い生薬である。

## 使用目標

### 『新版漢方医学』から

虚弱な人や老人で皮膚乾燥し、分泌物が少なく、掻痒を主訴とする例に用いる。

### 『日本医師会医薬品カード』より

本方は、比較的体力の低下した人の皮膚疾患で、浸出液はなく、発赤が淡く、皮膚掻痒感を主訴とするものに用いる。このとき、皮膚の乾燥傾向があり、軽度の貧血を認めることがある。一般に老人に用いられることが多い。

### 『診療医典』から

本方は四物湯に瘡疹を治する薬剤を配したもので、血燥を治し、風熱を解するのを目的としたものである。特に老人に多く見られ、血燥により皮膚乾燥し、風熱を兼ねて、皮膚に種々の発疹を生じ、分泌物が少なく、掻痒を主訴とするものに用いてよく奏功する。

### 『診療医典』から

この方は消風散や温清飲とは逆で熱状がなく、虚証で、老人や虚弱な人に用いられる。この場合の発疹には灼熱感がなく、皮膚面よりの隆起も少ない。

## 応用疾患

老人性皮膚掻痒症、透析患者の皮膚掻痒症、アトピー性皮膚炎、湿疹、慢性蕁麻疹、尋常性乾癬

## 鑑別

### 1. 温清飲

皮膚疾患の場合、一般に患部は乾燥して分泌物がなく、赤みを帯びて灼熱感がある。痒みが強く、引っ掻くとガサガサして落屑があり、引っ掻いたために出血したり、出血の跡が残る傾向が強い。

### 2. 十味敗毒湯

癰・癤を発し易いフルンクロージス、蕁麻疹、貨幣状の湿疹に用いる。

### 3. 消風散

頑固な湿疹で分泌物があり、痂皮を認める。外観が汚く、痒みが強く、口渴がある。

## 古典にみる当帰飲子

### 百々漢陰『梧竹楼方函口訣』

此の方は血燥によりて一身皮膚の痒き者に用ゆ。痒きを搔けば、その跡へばらばらと細き物出て、

強いて搔けば、血或いはたわ汁出て痛むなり。全て血燥のことなれば、とかく膚につやがなく、がさつく物なり。男女拘わらねども、老婦などに多きものなり。

#### 目黒道琢『餐英館療治雑話』

瘡疥その他、一切無名の小さき出きもの、半年一年の久しきを経て癒えぬ者、虚証にて此の方が応ずる証多し。総体、瘡疥の類、気血虚すると、その形平にして尖らず、かつ脂水じとじと出て乾かず、或いは乾くかと思えばじとじと出たり。痒み甚だしき者、此の方を用ゆべし。

#### 浅田宗伯『勿誤薬室方函口訣』

此の方は老人血燥よりして瘡疥を生ずる者に用う。もし血熱あれば温清飲に宜し。

#### 浅田宗伯『橘窓書影』

余、老人の頑癬を治する数十人、その痒痛甚だしく、熱なき物は当帰飲子或いは十補湯加附子(十全大補湯加附子)を用い、血燥甚だしく熱ある物、温清飲を用い、水気あって実する物は東洋赤小豆湯加附子及び真武湯加反鼻を用いて多く効を奏す。

東洋赤小豆湯：山脇東洋の創方。赤小豆、商陸、麻黄、桂枝、反鼻、連翹、生姜、大棗の八味

### 最近の論文から

#### 日本東洋医学会雑誌

なし

#### 和漢医薬学会誌

1. 大熊守也ら：皮膚搔痒症の漢方薬による治療。和漢医薬学会誌 10, 126-130, 1993

#### その他

##### 臨床

1. 堀嘉昭ら：老人性皮膚搔痒症に対する当帰飲子の使用経験。皮膚科紀要 79, 209-214, 1984
2. 大熊守也ら：当帰飲子の搔痒症に対する臨床的効果。皮膚 27, 1107-1112, 1985
3. 中村良一ら：慢性血液透析患者の皮膚搔痒症に対する当帰飲子の効果。臨床医薬 7, 227-231, 1991
4. 石井良夫ら：妊娠性皮膚搔痒症に対する当帰飲子の使用経験。漢方診療 12, 20-23, 1993

湿疹で困っているから往診してくれという。湿疹なら往診しなくても、外来で来られるだろうという。不安ノイローゼで車に乗れないという。それではと出掛けた。

患者は色の白い太った老女で、一カ月前に首から顔に湿疹が出来たという。今までこんなものが出来たことはなかったが、ある日、おけいこ事の大会に出たが、その時眼鏡を忘れ、台本を読むのにひどく緊張した。それから二、三日経って、顔が痒くなり、湿疹になったという。それにこの患者には不眠のくせがある。

そこで私は湿疹を治す目的で、当帰飲子の内服と、不眠を治すために黄連解毒湯の頓服を与えた。これで湿疹の方は間もなく全治した。不眠の方は多年の持病だから、軽快はしたが、まだ全治しな。

この患者のように、精神的緊張から、湿疹の出来ることがよくある。この春も私は七十五歳の老婦人の湿疹を治療したことがあるが、この婦人も首から顔に湿疹が出来たが、外出している間は痒みもなく、自宅にいると、ひどく痒いという。京都に五日ほど旅行したが、その間は、全治したかと思っただよくなっていた。ところが帰ると、その夜から痒くて眠れないという。私はこれにも当帰飲子を用いたが、一週間ほどでよくなった。この患者も何か精神的のストレスが影響していたのではなかったかと思う。

また結婚直前に湿疹の出来た令嬢を二人診たことがある。この場合も精神的な影響によるものではなかった

かと思う。この場合は消風散がよく効いた。同じ湿疹でも、その患者の体質、体力、老若の差によって、その用いる処方も違ってくるのが、漢方の建前である。

私の知っている青年は、幼少の頃から治らなかった湿疹が、ある事情で機が一転すると、そのまま治ってしまった。湿疹のようなものでも、精神的の影響はなかなか大きい。漢方で精神的影響による湿疹が治るのも面白い。

当帰飲子

当帰五、芍薬、川芎、莢利子、防風各三、地黄四、荆芥、黄耆各一、五、何首烏一、甘草一

消風散

当帰、地黄各三、防風、知母、胡麻、朮、牛蒡子、荆芥、木通各二、苦参、蝉退、甘草各一、五、石膏五

以上一日分とし、六〇〇mlの水に入れ、半分に煮つめ、滓を去り、三回に分けて飲む。

食欲がない・だるい・眠い

夏になると食欲がなくなり、手足をだるがり、食後に眠けを催して、仕事に身が入らなくなる方があります。こんな時、医師に診てもらったと、脚氣だとか、ビタミンBの不足だとか、肝臓が悪くなっているなどといわれ

病気が治れば、それでよろしいので、漢方薬療法を批評するものではないが、この機会に、この二つの治療法の違いを明らかにしておきたい。

漢方薬療法というのは、漢方薬を、漢方医学の理念を無視して用いることである。多くは、近代医学的な診断の下に用いられている。漢方療法は、漢方薬を漢方医学の診断にもとづいて用いる……証に随って……ことである。オーソドックスな漢方治療は、随証治療である。しかし、近代医学的な方法で、漢方薬を用いることも漢方の発展にとっては、重要なことで、あながちこれを排斥すべきではない。狭い門にしてはならないと思

う。今年の日本東洋医学会総会では、「漢方友の会」顧問大沢勝氏の指導で、新田伍一氏が、山豆根による癌の治療についての研究発表を行った。山豆根は元来中国産の漢薬であるが、日本ではこれにキヤマトヘラを当てている。大沢氏によれば、少なくとも60%の効果が期待出来るという。これによって治ったものは、免疫性を獲得し、しかもこの免疫性は遺伝するということである。

中国でも、神農丸という薬が、癌に効くということを発表しようである。これは通俗日刊紙の伝えるところ。その詳細は不明で、神農丸という薬が、どんなものであるかよく分からないが、いずれ北京から出ている『中医雑誌』に、発表があるものと思う。

なお、この他にも漢方薬による癌治療の研究が続けられているので、やがて明報がもたらされることであろう。

ところで、今までの研究は、すべて癌の漢方薬治療の研究であって、癌の漢方療法の研究でないところ

注目しよう。

癌を征服するのではない、癌と闘争するのではない。癌にかからない、もしくは癌細胞の発育しない、身体を作ること、漢方の建前からいえば、むしろこのような研究こそ、本格的なものではないだろうか。

運氣と漢方

——当帰飲子で治ったじんましんをめぐって——

この稿を書くに当って、運氣について、どんな解釈や説明が行われているかを知るために、手許にある二、三の辞典に当たってみた。平凡社の『大百科』には、運氣の項目がない。『大言海』にもない。『広辞苑』には次のように出ている。

「①自然のめぐり合せ、運命 ②天地、人体を貫いて存在するとされた五運六氣、漢方医学では、人間の脈に現われるとして重視した」

漢方医学では、天人合一の説があることによっても推察出来る通り、人は天地自然の一員であって、自然の变化は敏感に人の身体に影響すると考えられ、ここに運氣論発生の必然性があつた。

『素問』にも運氣論があり、我が国では寛永十二年版の『運氣論口義』がある。『素問』の運氣論は漢代のものではなく、唐代の人の手になるものとされ、五行説を導入して理論を展開している。この運氣論で、私は

